



4424
12





特
4424
12

3 29
16/2 21
31

五月号

申

◇自己中心明治文壇史◇
第十四卷

餘波の揺ぎ

はる水蔭

化物を動かす移る

明治三十四年の初夏

品川は於て三たび居を移す事と成つた。字
と陣を横町とりふ処に、大小七室之並附き、
庭園も廣く、建築も非常な凝つた。それ

平家だ、それ

いんか。
 後で他より種と聴いたのが、土蔵前
 幽霊が出る〜の評判で、誰と僕、年のあ
 有る〜と直さず逃げ出す〜、名代の化物
 気味ふ〜有つん。(〇)の幽霊は出さ
 が、問取りの具合が如何の陰気で、
 掃光共々不完全で衛生上は甚だ不良。女
 中の病人が續出し、又自分と〜多くの
 次第を以て海出つん。
 此所は著ての所の廣いので思ひ着いて、

No. _____

で家賃は二十四といふ家賃有つん。
 此の轉令、^{本日} ~~荷物の納まり~~
 とし、老船長が吐きり込んで来た。
 引越してせん。と、^冒頭 ^案
 此の言葉で有つん。
 イヤ、今引越して来たばかりだ。と自分は度
 膽を振るれば、^さ ^ま ^る ^へ ^の ^で ^有 ^つ ^ん。
 此の引越した好い〜と思ふするの。
 此家は他の出〜の評判 ~~出~~
 此は面白い。化物とユツリ話〜と見ん
 A 10 20 青山 二河原源三郎

No. _____

中

号6

- ▲泉 斜江 ———— 十四貫七百二十目
- ▲蘆塚 繁水 (都) ———— 十五貫二百目
- ▲武田 仰天 (東朝) ———— 十六貫目
- ▲小林 天鏡 (万朝) ———— 十六貫目
- ▲石橋 思榮 (中央) ———— 十六貫一百六十目
- ▲松谷 松葉 (朝) ———— 十六貫八百八十目
- ▲秋 彦 (長編) (二六) ———— 十七貫 ~~六百八十目~~

着衣の他、インハネス、~~中~~はカバンまで持つて、下駄穿きの儘ふり、正確でふいのは是非ふしで有つた。

No

五

文士相手を創出した。(此記事は『中世世界』二月号の要約を要す)

六月二十九日、各新聞及び雑誌記者が打掛として、常盤線の助川海水浴場招待された。日本鉄道會社の主催ふり、こゝが記者團を地方で歓迎する最初の試みで、こゝは別回流山に於ける旅行家懇親會の第二回と稱すべく、~~此間~~は坪谷水哉が幹事の役を取つたので有つた。

助川驛に於て、~~其時~~は各記者の体量と計つて見えた。無論、

A 10 20 書山 二河

No

申

顔で冷視してゐた。帰京の後、思案に向つて。
 新聞記者とりかたを考へたり。最少し何
 んとかしつらぬ成るまい。助川行の君は
 字不言語を絶してゐた。と云つて中絶した。
 日備はかり吐き出しで、少し江見のりさつた
 へ好いなり。と云つた時、新報の紅葉の
 腐声一書。
 江見のりさつた論外なよ。
 せん程別々悪い事さうな鐘ではよく、早の
 新酒落を連発したり、汽車の中つら〜

No.

五

▲井上與十(東海)——十四貫六百四十目
 ▲尾崎紅葉(護身)——十四貫八十目
 ▲江見水蔭(太平)——十三貫七百六十目
 ▲内田茂文(人民)——十三貫四十目
 ▲坪倉水哉(太陽)——十二貫九百六十目
 ▲佐頼得三(新報)——十二貫四百八十目
 以上は時事の永島永洲、太陽の山崎上野軒
 のりさつた、汽車の乗りかたを樹と云ふつら。
 日行、新報の門下の斜江を随行した。然
 ろ〜他の者が、巫山の歌をうたふ、若々しい

A 10 20 年 11 月 2 日 記

No.

信州戸隠山が大部分で指定されたのを、七月七日に隊員と共に出発した。途中で加入者があつた、長野市を待合せられた人々あり、いよいよ登山の時、探検隊員十名、人夫五名、総員二十三名、一ヶ峯の、当時の少年世帯山を連載し、待合の、奇妙な怪嶽山中、入り口の、二回、探検前の日原、乳洞と、戸隠山とは、大なり小なり世帯の少年は喜ばれたのであつた。

同月二十七日は、又一つ記者團と共に

即興的探検を試み、足がつかぬ、病軀の所、くび頭の紅葉は、覚醒を、挑むる、病軀の所、たゞ、あつた、いふ、か、行、相変らず、食物を、就て、ヤカマシク、鯛の潮が、甘過ぎると、刺身の、醤油を、チツ、ツ、と、泣き、あつた、ん。

山へ海へ、明治三十四年の夏、少年探検隊、第二回の探検地、探検者の投票、決定する事になった。其結果とて、

6中

房州有志の招待で賑々しく出立した。

顔觸日 都 蓮塚兼水 萬朝 小林云龍、

松居松葉 中央 石橋思京 太陽 坪谷水哉、

長谷川天溪 野知 福良竹亭 東朝 三澤茶

思庵、井倉弓軒 大朝 古我湖洲 人民 柳

澤柳里 新總房 高木敬木 東海 寺島松影、

其他で有った。

即川の歡迎と大掛しき有ったが、房州の反

響は破天荒の歡迎で、(廿後各地に記者團歡

迎は行けたら有った。

湖心の誓い 七月號の文藝俱樂部で発

表した。自分としては苦心の作で有ったが、

格別な反響を得た。

博文館では創業十五周年記念事業の一ツ

として、太陽の臨時擴大號 海の日

本紙を發行する計畫を構へ、その日は編輯部

受持海區を定め、順次各地調査

出張 事は成った。

世帯の一番乗りとして、自分が九州、北岸などが

西岸へと出張を命じられた。それは昔々文楽

7中

では有つんば、單獨でよく、時の海軍水路部
長海軍少将（後の中将）と成つて卒す）肝
付兼行の九州沿岸巡視に附随して行けといふ
ので有つん。

肝付少将軍人珍しく詩文も長け、文
学も理解あり。キヤポテン、クリーク世界三
周記の翻譯も出されて、海軍部での
最も熱心家ぶりで、曾て杉浦執へて来て講
義さん事あり。平素敬慕して
多しの心あるが、規則正しく軍人生活を一貫

八三三 第二回 海軍部

してゐる人、
不規律の甚だしい文士生活は

行くといふ事は、以上無い出所を以て、
熱せがはるゝんば、

けれども、海軍小説家を以て文壇を獨歩し
れい野心的なり、其野心を思ふにけり、
待て、同行を決定せん。

八月十二日に出発した。
（他は副官、柴少佐も同行し）
北平洋山の歌せ

了中

新聞を見るに、將軍一行の来着を報告するに記
 事[△]は次ぎて——在[△]原[△]那[△]雜[△]誌[△]記者[△]江[△]見[△]中[△]心[△]即[△]来[△]
 鹿[△]——と[△]り[△]テ、冷[△]淡[△]極[△]マ、書[△]き[△]振[△]り[△]を[△]有[△]つ[△]ん。
 野[△]田[△]三[△]島[△]の探[△]検[△]の[△]肥[△]前[△]平[△]戸[△]入[△]り、松[△]浦[△]
 津、福岡[△]上[△]陸[△]一[△]の[△]は[△]九[△]月[△]一[△]日[△]で、此[△]所[△]で[△]は[△]旧[△]知[△]の
 白[△]河[△]鯉[△]洋[△]の[△]九[△]州[△]日[△]報[△]の[△]主[△]筆[△]で[△]居[△]り、福[△]岡
 日[△]山[△]フ[△]は[△]山[△]口[△]天[△]来[△](恒[△]右[△]郎、現[△]代[△]議[△]士、中[△]央
 新聞[△]社[△]長)が[△]在[△]社。そ[△]の[△]神[△]戶[△]を[△]聞[△]ひ、時[△]代[△]の
 桂[△]木[△]門[△]下[△]の[△]桂[△]木[△]園[△]書[△]庫[△]并

てあるのを、畧す。十七日は長崎を旧見
 友社員池田研池のを催で、歡[△]小[△]宮[△]を[△]高[△]嶋[△]
 秘[△]帆[△]の[△]旧[△]邸[△]、小[△]島[△]郷[△]の[△]宝[△]亭[△]を[△]開[△]り、
 石[△]橋[△]忍[△]月[△]と[△]久[△]々[△]で[△]會[△]見[△]し[△]ん。
 二十一日、藤[△]見[△]嶋[△]で[△]日[△]春[△]山[△]春[△]城[△](史[△]海[△]の
 筆[△]を[△]執[△]り[△]し[△]人[△])の[△]訪[△]問[△]を[△]受[△]け[△]ん。此[△]地[△]で[△]は
 軍[△]人[△]で[△]あ[△]り[△]た[△]が[△]持[△]て[△]ま[△]ん、文[△]士[△]を[△]理[△]解[△]す。
 昔[△]山[△]陽[△]を[△]主[△]の[△]像[△]造[△]ら[△]れ[△]ん
 暗[△]く、粗[△]暴[△]を[△]振[△]つ[△]ん[△]位[△]で[△]す[△]ら[△]ん。山[△]陽[△]然[△]り、
 況[△]ん[△]や[△]水[△]蔭[△]の[△]お[△]い[△]て[△]あ[△]や[△]で、翌[△]日[△]の[△]藤[△]見[△]嶋[△]

A 10 20 青山 二回 藤見嶋

9中

ふい

の居り、又自分とは母の關係深き青木大明の
日九日教の記者で居り、其他關西文壇では知
名の喜多屋入と云い、今村外園、中野要、中野
が白分のなる、歡楽亭を聞いて居るんで、東
鬼崎で冷遇されたのを以て敢て取り返へん。

この旅行のなる、材料或は背景を得て、成つん

の、嶋が流れる。(太平洋—二四、十月) 海

夜の美。(文藝—三五、一月) 海上の文化

(中学世界—三五、一月) 呼子の瀬戸 (新

小説—三五、六月) 昔で、肝付將軍の聴いん

八二五 青木 二河野

随筆

海軍談は、小品として、教回を旦り、發表した。

矢、その思想上得る処が、少くもあつたが、

豫定の旅費を遣ひつゝ、電カワの校教を

請うんで、益の自の評判は、要を

つゝ、さ

新婚の波瀾

明治三十四年の秋

曾て 古陽 の 事 を 大甲 で 豫 報 した 時 は

を起筆し、大甲 で 豫 報 した 時 は

No

No

三

三

10 申

~~西村~~ ~~真次~~ ~~の~~ ~~経~~ ~~て~~、新声社の佐藤儀助の
 日題名が新し〜のり、出版〜と昔〜の
 といふ申込が有る。
 併し、それは佐藤が期待〜とある〜都會
 病の描写と云つた様ふ深刻ふよ〜と東
 京人の地方よ〜と有る、ホームシツクを起し
 て〜といふ、単純ふ短篇よ〜と易〜と云つたが、
 辭退し〜と有る。
~~其~~ 頃西村は内職の~~新声~~の編輯を手傳つて
 きて、文士訪問~~の~~ ~~記事~~ ~~の~~ ~~受持~~ ~~を~~、自分の漫談
 心談といふ單行本を新声社から出して、
 眉山、鷗伴、魯庵、柳屋、風葉、鏡花、宙外、
 抱月、天隨、鳴雪、直文ふどの諸翁を載せれ
 りが、その巻頭へ自分の~~目録~~ ~~を~~ ~~載~~ ~~せ~~ ~~た~~。然る
 して関係より、江水社同人の合作小説「新婚
 旅行」を引寄せると再度の申込が接し
 りて有る。
 再興の「小櫻」は、兎角経済上は不振で、二
 号で休刊し〜と有る、其資金を作るため、

No.

5

5

西村 ~~真次~~ ~~の~~ ~~経~~ ~~て~~、新声社の佐藤儀助の
 日題名が新し〜のり、出版〜と昔〜の
 といふ申込が有る。
 併し、それは佐藤が期待〜とある〜都會
 病の描写と云つた様ふ深刻ふよ〜と東
 京人の地方よ〜と有る、ホームシツクを起し
 て〜といふ、単純ふ短篇よ〜と易〜と云つたが、
 辭退し〜と有る。
~~其~~ 頃西村は内職の~~新声~~の編輯を手傳つて
 きて、文士訪問~~の~~ ~~記事~~ ~~の~~ ~~受持~~ ~~を~~、自分の漫談
 心談といふ單行本を新声社から出して、
 眉山、鷗伴、魯庵、柳屋、風葉、鏡花、宙外、
 抱月、天隨、鳴雪、直文ふどの諸翁を載せれ
 りが、その巻頭へ自分の~~目録~~ ~~を~~ ~~載~~ ~~せ~~ ~~た~~。然る
 して関係より、江水社同人の合作小説「新婚
 旅行」を引寄せると再度の申込が接し
 りて有る。
 再興の「小櫻」は、兎角経済上は不振で、二
 号で休刊し〜と有る、其資金を作るため、

A 10 20 書山 二 高野新報社

No.

八中

日 新婚旅行の題材として、同人各自の短篇
小説を作り、それを纏めて単行本として出すと
しるが有つた。
~~新編小説集~~
(堀野文録)

其頃、京の某兵衛が、日本橋博正町に文
球堂といふ書名を聞き、意匠を凝つた美冊を
出版して、評判が好かつたので、其方へ大澤天
仙を以て新婚旅行の出版を依頼し、其が
大乗氣を引受けると云ふた。その書は新声社の
佐藤が西村の口から聴いて、新婚旅行の好
題目であるから、是非自分の方から出版さ

A 10 20 書山 一 海峽新聞社

て出さうと、西村を以て申込んだり有つた。
前の『東京痴』の件があり、又断つてゐる氣
の毒と思ひ、文球堂の方は事情を打明けて
——他は代りの物を提供する。條件で——破
綻して、新婚旅行は新声社より出す事を
決定した。

新婚を以てして

すゝと大澤天仙が来て、堀野君は表紙の
意匠を考へて、大いに凝るツモリであつた。
他の小説を以ては、切角工風しるが
ブイも成ると云つて先細としてゐるらしい。

佐

No

No

中

老母の巻……………佳水
 小弟の巻……………萍水
 友人の巻……………花舟
 するとい事を佐藤が知つて 同日様お物を
 を同様に出したんでは困る。 といふ意味で断は
 つて来ん。
 昔懐を云ふふ文録堂の方からするのの本
 来い。 妙ふ方から云ひ出さるんが。 此
 江戸の子と贅六との差があるんがと秋葉は
 話し合つん。

小、それでは單々新婚と題して、同人の作を
 出版しれふと語つたが、その旨を請ふと云
 へんが、然るに如何です。 といふ話。
 自分は至極得意と思つて、早速同人の概
 念を以て 新婚旅行 とは別な又 新婚
 を出すと就て、一篇先の寄稿を促がむ。
 その役割はたのぬくで有つん。
 媒人の巻……………水蔭
 花婿の巻……………天仙
 花嫁の巻……………花嫁

ハ了申

新婚は九月に入つて、美花を連れて出た。

すゝと間もなく新声社より、新婚旅行の

題目で、他の新進作家の短編を集めて出版さ

れた。いよいよ狐さん、これ様ふ感づかしく

な。

老館を逝く

明治三十年秋の冬

上六巻の郊外

博文館老館を大橋佐平翁が十一月三日を
志し、六日午後一時出棺。谷中の養福寺で

A 10 20 巻 二 回 記 録 簿

盛大なる葬式が挙行されて、朝野の名士

が、多岐を会葬した。その棺側には、

編輯とて学業の事立ち上りしが、素草

鞋で立つ事と成つた。編輯側では、桂月、岸東

質軒、天宮、蝶、桂舟、そのほか自分と立つ

な。

~~老館主が日本の出版事業に~~

~~多大の貢献を~~

~~した事~~

~~を~~

計画

No.

No.

本年文壇の問題は、
 登壇竹風堂の二、三、
 詩が持出された事や。中江
 竹園助の一年有半の
 博文館の義休出陣で
 多くある事。その中
 中村春雨の、無果たるの
 評判の好い事や。で、
 紅霞路二家不振の事、
 亦各方面より高かっ。



得ぬ。自分は學生中、
 神々の文壇に立
 を書くに際し、
 文士相撲はナカ、
 松角、鶴伴、菊雨、
 大田桂月や、柳川春
 来るやうに成らん。
 陣を構へて待つて、
 客を置く道楽が再
 つれ。皆それゆゑ、
 No.

A 10 20 書区 二三四五

有らん。
 今年世界の編輯は、
 博文館へ運動する
 家で著作する。日
 No.



明治三十五年一月の
 せりねのは、
 多々益辨が
 明治三十五年の春
 依が載
 正事家
 後の
 No.

ハト

ず、唯輕體法師の言ふ事なる事すべて無
 意味也(下男)
 〇江見水庵の釋如くづれ 本陽の出家。
 男女二人、山奥まで始めを恋を知りし
 ふおろが、例の水庵の小細工の存する所
 して(中男)何事の精起しよし。
 甚だ不評判で有つれ。又同ド誌上、日饒台
 としてXXXX(花嫁?)の。
 〇(前男)の釋如くづれと日海夜の美のり。
 あり谷屋の痴に富み、折角の着想

文藝俱樂部 日海夜の美のり 日中
 世のり 日海上の花嫁 旅行記体の
 小説で有つれ。
 桂月が 本平海の紙上で 新年の文壇
 と題して批評し中する。
 〇水庵の日海夜の美のり 恋愛のなる家を
 棄て、名を棄て、富を棄て、世のあり
 ゆるものを棄て、孤島に窮乏して悔るが、
 而して一村の富、一國の富もこの世に
 へびる一箇の趣向、多少の詩趣ありとせ

A 1020 海夜 二回 海夜 海夜

16中

三月の同日の太平洋の連
 載した。四月の文藝の『
 寄稿』は、これは羽田と
 大森の往來で、當地
 を調査した位で、昔は大森海
 岸の早船で行くのが好い
 幸ひ、この大森海
 岸は、後の新派劇や活劇
 だが、但し公然無断無行
 女と相撲をとり、葉巻
 煙草を吸ふのが好い

この打境は、越有之は惜
 むべく、短篇は信へ、海
 の花嫁の自然なる方好く候。この
 作者の弊とする所は、その才あまり鋭く、
 その頭腦あまり明瞭なるが、其の
 拙むことあり、度々、折角の自然
 りきところ、全く細工の相成や
 然るに有るべくと云ふ(下巻)
 太平洋の梅の
 一月の連載
 三回

三河新聞社

ア申

編輯主任の云々は能程迷惑しなく、自分は又いよく
館主の信用を失うんぞ有つん。

12月 過剰人を斬る

明治三十四年の夏

例の記者招待を福嶋縣相馬の野馬追祭と

見物へ行つんのは、七月一日の事で、女

顔解は、思案、紫水、水哉の定連の地、毎

日、石川半山、国民、吉田勿来、中央、田村

江東、時事、筒井年峰、朝日、黒田撫水、萬

朝、松山満潮、新小説、前田晴山、朝知、福

尾竹亭著で、二日は原町の騎馬行列を見て

A 10 20 青い 三河屋製紙

小島町へ行か、火の祭を見て一泊。三日は

松川浦を舟遊して中村町に一泊。自分は思案

年峯二子と共一行り別れて、湯本の温泉に

一泊して四日は帰定した。悔しい物言ひ、

この夜、不圖、~~眼を覚まして見ると~~、~~帳帳~~、~~しよ~~

枕頭を見ると、洋燈の光で、尻桶が一人思ひ

入つてゐる。

そこには、~~の麻~~大刀が立てかけとあるものを有つん。

今声を發して、彼は其刀を拵かめり、限

かゝい。自分の刀で自分が斬らるるは悪む

No.

No.

三

194

りで、実差の間は下へ判断を下さうて、自分にはイキナリお帳をひき、枕頭の一刀を取るや、次の間はおどろき。
^日尻棒、尻棒と叫ぶ音が、闇中に春鳩あく
新に斬られた。一電燈は普及してあるといふ時
で有った。
[△]それが[△]尻棒[△]で[△]おく[△]家の[△]
[△]女中[△]有[△]つて、[△]後頭部[△]を[△]深く
[△]髪[△]の上[△]へ[△]斬[△]らん[△]が[△]有[△]つた。
[△]不肖[△]ふ[△]つた[△]
[△]武門[△]ふ[△]生[△]れ、[△]幼少[△]の[△]幼[△]道[△]も[△]学[△]ん[△]が[△]お[△]が、
傳家の宝刀で、尻棒と間違へて、女中の頭を

87

と、思つて、^其儘眠りを結つておる。
尻棒は用算符の上へ置いた^{自分の}金時計と、紋入と
(丸印、宝印等)家の内へ指環等を這ひ
更に入を聞いて、マッチを探つた。(其時は
お帳返しから^横顔を^見せ、^{見知らぬ}青年で有った)
此所には書籍ばかりあり、彼は矢張りして
この間は移つた。
自分も一代の失策は之りで、何分三日間
接ひ^おその^頭脳を^酷く^不良^くして^おる^をお^もう
(その間は平素の精神修養も、缺陷が有つた)
A 1020 青島 二河原野村

20中

文通を交けしめる)

東が、とは知らず六日の都を見るとき、自
 分の尼棒を今までのく相違の手を取る持が
 らしく極く滑筆風を書いて有つたが、どう
 して、そんな書量の好いのかはよく、思
 子とては、以上といふ大失態を演じたので
 有つた。

この事件の翌朝、突然の東京朝日の水谷
 幻花が栗島の紹介で、^{初めに}訪ねて来た。後氣立つて
 自分の面相を見て吃驚したといふ。

斬るゝ不覚、輕率、粗忽、何んといふ自
 分は馬鹿者であらうと、以時位自分で自分の
 愚かさを悔む事は無いので有つた。

自分の性格は確かには時々の一轉化が有
 つた。今で、脱線性の富んでゐるが、幾分の
 謹慎味を帯びて来たのは此事有つてからで、
 それまでは全く無~~心~~戒心の、意の向き情の走
 る儘に果れ廻つてゐる田~~か~~ふりでは

尼棒は捕まらぬか、女中の~~手紙~~は

意外に、~~手紙~~奉~~返~~り~~後~~、待て、今日で
 早く全~~部~~に~~後~~其後其縁を

A 10 20 再出 二回 日記 巻末

21中

この幻花は先史民族の遺跡調査に興味を持つ
ところ、^{その}東洋の歴史を引く
の郊へ挿入し掛けたので、いつの自分
の仲間に入る様になった。へた方面の事は
地底探検記の^中に地中の秘密以上博文
館発行。三十年前、^の空想界之日本社発行の
しげが(思ふ)

千円の脚本料

明治三十五年の初秋

A 10 20 青山 三河 齋藤 啓

突然川上喜二郎が博多館の編輯の自分を
訪ひ来る。第二の洋行で成功して帰朝
先は何処へ^い目をうつす、一方向きであるの
で有る。

彼は感心したに謂で。

廣い世界を私の味方と成つて呉れるのは、
益強丸の吉永良造と、貴部が知り得ず。それで
帰朝第一の清利改良権争い、才せ口を出した
いと思ひますが、その^お難案を貴部にお頼み
ます。脚本料は千円差上げます。よし、それで

No

No

22中

ふので有つん。
 川上といふ人は感情の即進な妻とて其時の
 意志を無考處に發表する——發表する時は
 眞劍ぶのいかに熱が冷むものと後悔する。其為
 る世人のりは法螺吹きも皆倒れ、或は權謀
 家と認識するのいかに、それは可哀なりで
 推氣の多量に含するん好人物——自分^{の眼}は然
 う映じるのを有つん。
 其後、新橋の花月で二三度酒^{食を共にし}を飲ぶ

失敗し、伊一請に又洋行致し、
 其の意味を一氣に語り出さん。
 その前、外国より粉回^音信の受取つて居り
 土産物として羊^{スリヤ}杖^{チカ}鏡^{カミ}を先きの道^{ミチ}所^{トコロ}と來てゐ
 るのいかに、^{其時代の}千田の糧料で、自分の脚本を
 依頼し、^{其時代の}とは意外で有つん。
 千田さんていふいかに喜氣を感じ、只
 で書か、と云ひ、^{其時代の}押さへて
 下さり、私に萬事委^{まか}せて下さり。貴郎が
 千田受取らなければ二人で呑んで了^{しま}うさぞ

A 10 20 青 三 西 國 語 文 學

2丁中

予、紅葉を就て松山の語つたのりから推して併し、之より前、堀松山が入社してゐる。主幹の小野頼不二人は、~~内部の~~内部の編輯の結果も有つたのり間いれ。紅葉の二六入社の際、(十月二日稿)當時、評判で有予が多病の故に、十餘年の締合窓ある、~~新聞~~新聞と絶つて、未だ樂くあらぬに、二六新聞社は予の親友某々の二氏を以し、不肖の爲に厚遇の椅子を拂つて、懇意招きのありあつた。(中略)予は先づ問

No _____

2

のり、オセロに就て何の打合せせん。
~~予~~予は紅葉は、~~新聞~~新聞の編輯のり、退社した。神樂の金色夜叉の書きもの、大分ダレてゐるが、十月には長田秋房の編輯で、二六新聞社に入社せん。
 同社長松山定輔とは、大正時代の顔を見知つてゐるのり、定輔は政事はあつた、~~紅葉~~紅葉は文学を従つたので、~~文は無の~~文は無のつたのり、~~予~~予は時頃の松山は、~~文工~~文工の全然容れ~~て~~るあつた。(後)後、自分が入社した時

1020 書 二河 湖

神樂の

24中

差が認められん
 之より前、正岡子規(九月十九日)は死んが
 それより金港堂からは依々醒雪が主筆で
 神谷鶴伴が編輯して「文藝界」を發行し、そ
 の臨時物として「夜」の東京と「いふ」各文士の小
 品を収録して、評判が好かつた。
 自分は「文藝俱樂部」の花水川と寄稿
 した。右「序」の「桂月」が「最近の小説」として
 批評した中だ。
 太陽を放ける魯庵の「新小説」は於

は「バ」の「者有る」が「おる、えき」以
 て氏は考へん
 曰く、正下は予が名声を買ふの事、或は
 竹園の病骨を買ふの事。秋山氏は曰ふ、固
 より其病骨を買ふのであると。奇を裁
 言や、予が入社。意は之がな、愈々動い
 ぬ。(下略)
 多病の故は十餘年の綿合を解いた。詩書
 の態度も、其病骨を買ふに二六の態度と
 實は天地の

A 10 20 青丘 三河原清太郎

25中

紅葉退社後の
 鑛亭は、石橋忠業が入社し
 てゐて、紅葉の穴埋の小説は、自分へ寄稿を説
 さいました。
 自分としては前退社
 あり、紅葉までが甚だ不快の裡に
 引受けのには、何んともなく氣持が悪い
 と辭退した。

博文館を退く

明治三十五年の秋

~~紅葉退社後の...~~

や、すむらり(下巻)
 花水川、柳池の雨、藝山の白浪の三篇、
 亭の破れ圍角、都合十二篇は、余が讀み
 たる處の雜誌小説也。(中略)水蔭の
 跡、本館の雜誌)に於ける水蔭の花水
 川、紅葉の露金世界、紫軒の北原星、霞
 の岩うつれ、捕汀の蓮展屋、霜川の浪の
 白浪、花峯の煤烟、小天に於ける秋声
 けの柳原の雨、斜汀のはやり雄、芸山の

26申

それで先づ角自分な批評して花と云ふ
 のを送る事をした。へ斯うな義理の立て合
 ひは、今の文壇では流行するまい。

その日花を執筆中よ、川上あきは才也
 の起稿を任がせて貰った。

実際又大きな問題が持上った。

それは専ら編輯部の大刷新で有った。
週刊日本青年は実業雑誌と変わるが主たる変動で有った。

十月一日には小波が猛烈な朝野を
 当然小波が又元の少年世界の主要な点
 のは、分り切らざるものも有った。

君は花の如く、先づの志の後
 心は、イヤだと云った。それで実個人と
 て紅葉の如く行つて相対の結果、君の如く
 持つていって好む事と云ふ事で、それで有る
 んに、あつて紅葉へ義理を立てる事は
 何もない。と思ふは云つた。

君は紅葉へばかり義理を立て、僕の困つて
 るのは構はないのい。

27中

又「文藝の編集部」の「三宅青軒は、
 小泉某といふ金を叩いて「文藝」の雑誌
 を発行する者、退館するといひ出づてゐる。
 或の坪谷水哉が、店の表二階の「出展部」の
 自分を呼んで「文藝」の筆を成る氣は思ひ
 かと問うるが有つた。
 自分はそれに向つて ~~自分~~ 拙劣な
 著者一方に立つた方が ~~自分~~ 宜いと思つた。
 それで、いふので水哉は、世通りを館を
 又「文藝」の筆を自分か ~~自分~~ 拙劣な
 ハチは石橋思案、退つて行つた。 ~~自分~~ 拙劣な
 編輯法より新手段を有し、活字運用の
 一寸意匠は富み、且つ勤勉家だ。 ~~自分~~ 拙劣な
~~自分~~ 拙劣な
 直ちに採用するに譯で有つた。
 自分は館を呼ぶが、
 乙羽君の死後、君はたいは働いておる。ッ
 モリがつかへんど、怠りばかりある。 どう

五

又「文藝の編集部」の「三宅青軒は、
 小泉某といふ金を叩いて「文藝」の雑誌
 を発行する者、退館するといひ出づてゐる。
 或の坪谷水哉が、店の表二階の「出展部」の
 自分を呼んで「文藝」の筆を成る氣は思ひ
 かと問うるが有つた。
 自分はそれに向つて ~~自分~~ 拙劣な
 著者一方に立つた方が ~~自分~~ 宜いと思つた。
 それで、いふので水哉は、世通りを館を
 又「文藝」の筆を自分か ~~自分~~ 拙劣な
 ハチは石橋思案、退つて行つた。 ~~自分~~ 拙劣な
 編輯法より新手段を有し、活字運用の
 一寸意匠は富み、且つ勤勉家だ。 ~~自分~~ 拙劣な
~~自分~~ 拙劣な
 直ちに採用するに譯で有つた。
 自分は館を呼ぶが、
 乙羽君の死後、君はたいは働いておる。ッ
 モリがつかへんど、怠りばかりある。 どう

中

林知はあか少年
で有つんがうまは
一番巧いん。

昨夜の
修稿の
は万朝の
其金を持
副稿の方
川上へ
更には自
右郎の
一二ヶ所
子向い。

修稿の
は万朝の
其金を持
副稿の方
川上へ
更には自
右郎の
一二ヶ所
子向い。

修稿の方を
川上へ
更には自
右郎の
一二ヶ所
子向い。

修稿の方を
川上へ
更には自
右郎の
一二ヶ所
子向い。

修稿の方を
川上へ
更には自
右郎の
一二ヶ所
子向い。

猫
不河解の
天の
一
問
し

廿
貌
姑
射
山
人
の

君は働けがイララ、働け
る人あんが、
そい、
の、
け、
自分、
一、
位、
その、
万、
吉川(和)

君は働けがイララ、働け
る人あんが、
そい、
の、
け、
自分、
一、
位、
その、
万、
吉川(和)

君は働けがイララ、働け
る人あんが、
そい、
の、
け、
自分、
一、
位、
その、
万、
吉川(和)

君は働けがイララ、働け
る人あんが、
そい、
の、
け、
自分、
一、
位、
その、
万、
吉川(和)

君は働けがイララ、働け
る人あんが、
そい、
の、
け、
自分、
一、
位、
その、
万、
吉川(和)

29 申

小波は十月三日、^(汽車で)帰京した。自分も
 此を^{おき}出^て上^へ、^{赤い}茅ヶ崎^の川上の別荘といふ
 小波の本宅)へ行くと、オセロを打合せを
 して、その夜、小波の舞うてゐる列車を待
 合せ、昔の帰京した。
 十一月十六日である。川上から三河の
 小切手が届いた。それは横濱正金銀行、^{支拂}
 成るるん。
 自分はその受取ると、休養を行くつもり
 で、しかし留守の金を置きの成るるん、

司 お貞は芝居へ出ると云つてゐるさうだが、
 それはいかん。デステモナ(鞆音)の役はお
 貞がやるんけい、いかん。と云つた。
 どので、~~困~~、と云ふす、どうか閣下、
 お貞へお叱つて願ひます。と川上は依頼して
 ました。

~~筆跡~~

24

文士?、盗賊?

明治三十五年秋、冬

10中

の無いので、茅ヶ崎の銀行へ、両替を頼んで
 す。銀行では、川上の書生が、大金を持
 ち、早く合点して、刑事を密告した。刑事
 は、川上の如く、今、貴郎の如く、
 大金を持ち逃げした者が有る筈です。
 をお調べ願います。と、いふ騒ぎ。
 せんふ事では、自分、塔之尾で、佐東の来る
 のを待ちあぐねてる。如く、夜に入を斬く
 入り、小銭をくづした。百円の銀貨銅貨を
 懐中や、詰や、ガク、出して、是々

佐東を同行して、横濱へ行く。同行を
 銀行へ行くと、小切手を渡すと、川上の方
 には、何ん、~~おれ~~、ふいといふので、それで
 は、パイ食はされたか、と、大立腹。
 自分は、今更、帰定、おれ。矢、子、角、の、相、根、の
 環、環、場、へ、行、つ、て、る、ら、う、と、君、は、茅、ヶ、崎、へ、行、つ
 て、川、上、の、掛、合、つ、て、ま、ま、と、い、ふ、事、を、し、ん。
 佐東は、早速、川上、と、話、ど、て、~~おれ~~、百、円
 紙幣、三、枚、を、受、取、つ、ん、ま、は、好、い、つ、ら、い、小、銭

中
し
し

の災難と報告するんで、大筆ひと成る。

一方、留守宅では、世頃の文士とては大

金の三百円を、首尾よく二人で受取つた。

箱根・真砂づりしてると思つて、家の顔

色を變へて、一番汽車で舞止むふどの滑り

海じもあら。(こめを) 二六日は、

の筆で、日 文芸者とる田札と題し、

入らて、三段と巨つて書き立てん。

自分は、その、沼津の、三嶋、脩善寺

と、冷川、山留で伊東まで、

A 10 20 青心 三河國岡崎記

国府津、上、を、帰る。

文士相携——石巻集——冒險小説——

新劇脚本——斯うして自分は次第々々、

文藝と遠ざかりつゝ行くので有つた。

来るべき新春、それはいよいよ川上が帰

朝日神の旗幟を、オセロを明治産で

興行する計畫が立つたので有つた。

貴郎、一縷の舞台へ登るせんか。カツシオ

(勝芳雄)の役をやつて下さると好いんです。

と川上は、真面目な様子、

神戶の記者劇で自分の芝居藝の有るのを知つて居る。

言つて御めふじらん。 ~~真奴は又~~

~~自分は何し~~、そこまで身を ~~踏~~ 踏しなく無いと

考へて、絶体 ~~その~~ 是れは ~~御~~ 御だといふん。

真奴は又、自分 ~~の~~ 出まひ ~~の~~ を知つてあて。

~~私~~ ~~は~~ ~~要~~ ~~の~~ ~~立~~ ~~つ~~ ~~の~~ ~~は~~ ~~イヤ~~ ~~で~~ ~~す~~ ~~が~~、

江見さんは ~~出~~ ~~ま~~ ~~ひ~~ ~~を~~ ~~好~~ ~~い~~ ~~で~~ ~~せ~~ ~~う~~。江見さん ~~の~~ ~~出~~ ~~ま~~ ~~ひ~~ ~~は~~

と ~~難~~ ~~題~~ ~~を~~ ~~え~~ ~~つ~~ ~~て~~ ~~川~~ ~~上~~ ~~を~~ ~~困~~ ~~ら~~ ~~せ~~ ~~う~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~が~~、

真奴 ~~の~~ ~~出~~ ~~ま~~ ~~ひ~~ ~~を~~ ~~倒~~ ~~の~~ ~~川~~ ~~上~~ ~~の~~ ~~権~~ ~~謀~~ ~~の~~ ~~様~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~が~~、

は ~~全~~ ~~く~~ ~~無~~ ~~い~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~が~~、

然 ~~し~~ ~~は~~ ~~無~~ ~~い~~ ~~の~~ ~~を~~ ~~有~~ ~~る~~ ~~ん~~。 ~~世~~ ~~間~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~ん~~ ~~だ~~ ~~ら~~ ~~な~~ ~~い~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~が~~、



